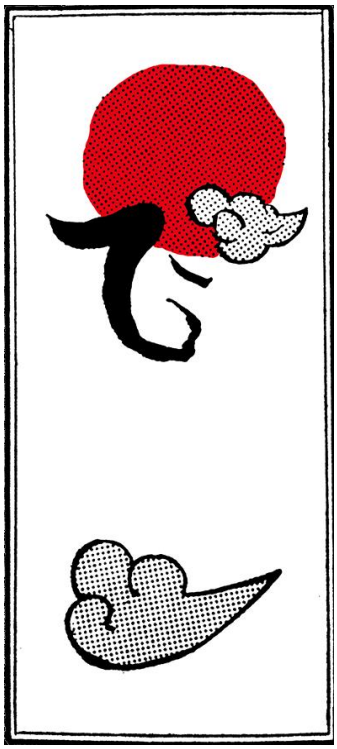

第 37 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲 720-1
TEL:080-2986-0856

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道(十一)(大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

―実在―(一)

「汝自らを知れ」ソクラテス

第三、従って彼は「教える」のでなく、各自の陣痛によって美しく生み出さるべきものとして、その哲学を「助産術」と呼び、「問答法」によって、自らを「蜜蜂」と称して、相手の欠点を刺し、その矛盾を自覚せしめ、各自の意識を吟味尋問することによって、否定し得られない究極の徳矛盾の極みの絶対の統一の徳に自覚せしめ、真の自由人たらしめんとしたのである。この「問答法」が「否定の哲学」となり、「弁証法の哲学」の淵源となったのである。

第四に、彼は自然学者のアナクサゴラスが理性を万物の運動の原因としながらも、個々の人間の行為としては認めず、行為の原因を筋肉や腱に帰した「機械的唯物論」に満足せず、それは行為上不可欠ではあるが、真の原因は、行為するか否かの、「自己」または「霊魂」にあるとし、財産、名声、物欲などの自己の物と、真の自己との別を知らず、自己を自己の物に、霊魂を肉体に従属させる本末転倒せるを論じて、人間の堕落、アテネの腐敗を責めたのであった。ここに唯物論に対して唯心論(観念論)を提起したのであった。西洋哲学は唯物論と観念論との闘争とも言われるが、彼はそれまでのギリシャ哲学の外的なる自然から内なる自然(人間の本質)を主とする学、機械的唯物論から弁証法的観念論に移行せしめたのであった。

第五に、彼の哲学は「知行合一」の哲学であった。彼は書かなかったと言われる。勿論言葉も文章であるし、文章も言葉である。書く書かないは問題ではないが、「太初に言葉ありき。」で、言葉は神と偕にあり、言葉は神でもある。ギリシャはロゴスを言葉とした。問答は真剣勝負であり、霊魂が生きている。言霊である。文章も然るべきであるが、ややもすると遊びになるおそれがある。彼は当時の「自ら徳ある者」とし、空論を弄ぶ詭弁論者に対して、「自ら愚かなる者」とし、勇気、節制、智慧、正義などの道徳的実学をもって、己を真の人間たらしめ、社会国家に礼節と正義あらしめ、宇宙の真実を人と世に実現せしめんと、自らその実行者となって、毒杯を仰いだのであった。哲学は空虚な概念の遊びではない。「如何に生くべきか」の生命をかけての「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり。」の第一義の学であり、真に人間として生きる為の学である。知るとは行うことであり、行うことはまた知ることである。知って行い、行って反省し、矛盾を統一して更に知を真にし、更に行い、また反省して、真実に進み、真実を行ぜんとする「実践の学」、「知行合一の学」なのである。彼は身をもってこれを示したのであった。

以上、ソクラテスのことを五つの事項に分って述べたのであるが、人格は融合統一された生命である。分っては生命を失う。彼にはより深くより高くより広い世界があったであろう。以上の私が五つの事項として取り上げたものも、彼の内部にもつ世界の一部の相にすぎないであろう。然し、この五つのものをもってしても、彼が西洋哲学の淵源たるを識るであろう。彼の言った「愛知即哲学」こそ、真の哲学の本質である。

第四章 士道論

～第二節 士 ― 命、志、道～

菅原 兵治

境遇及性質

抑も人間には皆与えられた「境遇」というものがある。

汝は何故に牛馬として生れないで、人間として生れたか。
汝は何故に外国人と生れないで、日本人として生れたか。
汝は何故に他家に生れないで、汝の家に生れたか。
汝は何故に他の父母を父母とせず、汝の父母を父母として生れたか。
汝は何故に男子（若しくは女子）として生れたか。
汝は何故に長男（若しくは二三男）として生れたか。

私は右の関係を概括して「境遇」というが、何人か果してこの与えられた境遇の「何故に？」に所謂科学的に明確な解答をなし得るものぞ。

更に吾々には天稟の「性質」という不可思議のものがある。

汝は何故に斯くの如き体質を有して生れたか。
汝は何故に斯くの如き性質を有って生れたか。

遺伝の法則というような模型的算式で之等を説明し尽したと誇り居る者は暫く措く。苟くも之を自己直接の問題として深思する時、果して疑いなきを得るであろうか。吾を何故にこの「境遇」の上に置きてこの世に送り出せしか。吾に何故にこの天稟の「性質」を与えて此の世に生れ出でしめしか、そは思うことの切なれば切なるほど、誠に魔迦「不可思議」である。

楊子は「其の然る所以を知らずして然るものを命という」といっているが、以上の「境遇」及「性質」の決定こそは実に「命」なのである。吾々が此の世に呱々の第一声を挙げたその時（厳密にいえば母胎に宿りしその時）既に必然の「命」の上に置かれているのである。否「命」そのものとして生れて来たのである。斯くて生命は天命である。（天は絶対を意味する。天命とは絶対なる命の言である。）従って尊き必然であり、尊き拘束である。吾々は先ずこの「命」の必然を明確に自覚せねばならぬ。汝の境遇は如何。汝の稟性は如何。吾々は先ず「汝自身を知る」ことが第一である。熟々思うに、この「命」は各人全く唯一無二にして全然相同じきものは決して二つと存しない。如何に相類似せる二人の命と雖も、其の時に於て、其の処に於て、其の関係に於て、全然相同じきものは決して存しない。全宇宙を通じて幾千万億の人間が生るるも、吾と全くその「命」を同じうする者は一人もあり得ない。斯の意味に於て其の誕生に当って「天上天下唯我独尊」と叫び得る者、必ずしも釈尊に限るべきではない。一切衆生すべて是れ「天上天下唯我独尊」である。然り、この命は、吾を主として見れば他の何ものと雖も、決して吾たり得ざる最勝のものであり、同時に若し他を主として見れば、吾如何に焦慮し、如何に号泣するも、決して彼たり得ざる天上天下唯我独卑のものかも知れぬ。最勝と見るか、最卑と見るかは暫く措く。唯吾が「命」はこの全宇宙に唯一無二の「命」なるが故に之を「尊」という。

私は「汝自身を知れ」の格言を此の意味に於て「汝自身独尊の命を知れ」の意に解する。吾々は斯くて我独有の命を確かに見つめ得た時は先ず三界孤独の淋しさに襲われる。けれども亦それと同時に吾独有の道の存するを覚れば、独往の勇憤に躍る。前を望み後を顧み、右を見左を見て、吾と全然同じき道を歩みし者も、又歩む者も一人も無いことを知る時、吾は何人もの模倣も追従も出来ぬという淋しみと共に、又全く新しき道を拓いて露堂々と進む独往の悦びに躍り得る。涙と笑と同存する緊張である。この緊張を以て「命」の上に確立して前方遥かに望む時、其処に吾独自の彼岸（到達点）がくっきりと現れて来る。この彼岸こそ実に吾々の「志」である。実に士たるものの生活の開眼たるべき尊き「志（※註一）」である。

既に出発点が確定（※註二）し、到着点が確定すれば茲に自ら吾が独往邁進すべき走路が生じて来る。此岸より彼岸に到らんとする船路が明らかに示されて来る。この人生の走路―波羅密（到彼岸）の船路こそ取りも直さず其人の「道」である。

（※註一）　然し此処で留意せねばならぬことは、「志」及び「道」の内容である。苟くも「志」という以上、そは士たるの心であって、理性の所産であらねばならず、随って其の「道」も亦当然道徳的のものたるべきことである。それを志を立つると言いながら、それが我執、我欲の所産であった場合には、それは実は「志」では無くして一つの「欲」に過ぎず、随って其れに至らんとする道も不知不識の間に邪道―道ならぬ道―に陥るのである。こう考えて見ると、私共は士道を行ぜんと欲せば、先

ず如何しても十分に聖賢の道を学んで心性を明めねばならぬ。

（※註二）以上「命」と「志」とのことを述べたが、そは決して不動のものではない。人生は造化であって不断に生々たる「易」そのものである。従って命や志の状態も実は其時其時に易るもので、昨の志は今の命となり、今日の志は明日の命となると考うべきものである。「五十にして四十九年の非なるを知る」日新の生活こそ、尊い精進の過程であらねばならぬ。

純粋性

三浦　夏南

宣長先生の国体に関する議論は儒仏に対する激烈な批判から、過激なもの極端なものとして捉えられることも多いが、私は過激と言われるまでに似て非なるものを排斥し、我が国の国体の純粋なところを明らかにされた宣長先生に大変な敬意を持つものである。これと正反対なのが、戦後の保守主義であり、資本主義および民主主義に妥協し適合する範囲内での日本精神を主張するものである。宣長先生の国粋を尊ぶ真心と、漢心を憎む烈々たる気迫を思うとき、社会の現状に媚び、自らの立場を守るための日本精神論には何一つ魅力を感ずることがない。

私は明治以後日本を表面に於いて豊かにし、内面に於いて腐敗させてきたところのあらゆる近代的産物に妥協すべきでないと思っている。西洋がもたらした近代文明のおかげで便利な暮らしが享受できているのではないかという人も多いであろうが、その便利さは無条件で我々の暮らしに便利を付加したのではない。我々にとって大切な何かを犠牲にすることによって手にした利便性である。我々はその失ったものを見失い忘れてしまっているだけである。エネルギー保存の法則というものがあるが、人類が利便性を手にするためにした無理は必ずどこかに歪を生み出している。近代社会が生み出した豊かさは誰かの貧困を代償としてでしか得ることのできない似て非なる豊かさに過ぎない。戦後の日本はそのことを知りながら、あるいは知らずして、近代社会生活の中に日本精神を表すという偽善的な活動を行ってきたのである。その偽善が生み出した負の側面を肌で感じ取っているのが私のような平成生まれの人間であり、令和の人々は斯くの如き偽善を排斥し新たな創造を行う時代となっていくだろう。

これからの時代には妥協的な一切の思想、実践が無意味に帰する時代である。例を挙げれば、「学校教育を日本の伝統に基づいた正しい教育にしよう」と言ったような聞き古したスローガンが何の意味も価値も持たなくなる。何故なら学校という近代が生み出した画一的で無機的な教育機関自体の無価値が明確化しているからである。今の学校は良いか悪いという意味のない問いではなく、学校に代わる伝統的な教育の機構とは何かという問いに次元が変わらなければならない。他にも「核家族ではなく、三世帯の家族に戻ろう。」などといったスローガンにも意味がない。農本的共同体、血縁的一族集団が近代的な国民の概念によって分断された為に三世帯家族、核家族と徐々に分裂の度合いが深刻化しただけの話である。核家族と三世帯家族の間には程度の差こそあれ、本質的な差はない。土地と切り離され、血縁者の協働を失った今の家族が本当の意味で家族と呼べるのかどうかがそもそも疑問である。一日中ばらばらに生活している血のつながった他人が今の家族ではないか。昔の百姓の如く、共に耕し、共に祭り、共に食し、共に戦う、生活共同体こそ真の意味で家族である。親は会社に、子供は学校に、祖父母は家にという三世帯家族はそれに比すれば、血のつながった他人であり、いつしか身も心も離れ、核家族となるのが当然である。私の曽祖父は祖父が少年の頃、祖父が野球をしていると、「この子は長男で百姓仕事を覚えさせねばならないから、いつまでも野球で遊ばせておくことは出来ぬ」と教師に言っていたそうだ。現代の世にこういう親は少ないのではないか。子供は自分とともに働き、共に生きるものであるとの生活共同の意識が現代の家族にはない。すべて近代社会に依存してしまっている。子供は大学に行かせて好きなところに就職させれば良いという考えを古人が知れば驚くのではないだろうか。他にも上げればきりはないが、妥協的発想には意味も価値もない、全ては本質的な次元から発想されねばならない。

朱子学的に考えると我が国の歴史は王道を歩んでいるという考え方に宣長先生は我慢がならなかった。我が国の偉大なる歩みを外国の目を持って評価する奴隷的な態度を先生は激しく非難されたのである。現代に生きる我々も常に自分の内に潜むへつらい心を明らかにし、排除し、徹底された純粋なるやまとこころで世の中を見、行動を起こさねばならない。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

朝日が昇る時間が早くなり、農作業に取り掛かる時間も自ずと早くなってきました。アスパラガスの葉は完全に展葉し夏芽の収穫もぼちぼち始まりました。地域の中でもアスパラガスを栽培している方は多くはいらっしゃらないので、ご近所さんにお裾分けすると、非常に喜ばれます。お礼にとキャベツや白菜、スナップエンドウや柑橘と、それぞれの農家さんが作っていらっしゃる新鮮な作物を頂き、食卓が季節のお野菜で賑わいます。来月よりアスパラガスの収量も増え、毎日の収穫・出荷作業が始まる予定です。こまめな追肥と防除を行い、長い期間品質の良いアスパラガスが収穫できるよう頑張ります。

葉ネギに関しては先月無事完成した育苗用ハウスの中で、さっそく播種作業を行っています。毎月約百二十セルトレイを播種し、定植する予定です。苗を育てるのは初めてのことなので、お世話といえば水やりと温度管理だけですが、無事に発芽した姿を見るまでは「水分が足りていないのではないか」「はたまた水をやりすぎているのではないか」と心配になります。来月末から再来月には、元気な苗が無事圃場に植えられるよう祈っています。

昨年の半分以下に面積を減らした里芋も、マルチをつついて芽を出し始めました。去年は八枚の圃場に分かれていましたが、今年は一枚の大きな畑で育てているので管理もしやすく、芽だし作業や草管理も丁寧に出来ています。

毎日、一生懸命農作業に明け暮れていますが、その甲斐あってか地域の方から少しずつお土地を貸して頂いたり、買って欲しいと言って頂いたりするようになりました。長い間受け継がれてきた大事なお土地を受け継ぐことは重責でもあり名誉なことでもあります。後継者不足や高齢で手放さざるを得なくなった大事なお土地を大切に預かり、家族みんなで協力し、継承発展させていきたいと思います。家の近くでお借りした一つの土地で、先月より春夏野菜の家庭菜園も始めています。息子たちもその畑で熱心に走り回り、道具を見つけては掘ったり引きずったりして、見よう見まねで農作業に精を出しています。

日に日に暑さが増し、農作業の時間も長くなりますが身体を大切にして毎日清々しい気持ちで農業に励みたいと思います。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込先

「ひの心を継ぐ会」
愛媛銀行・本町支店・普通預金
口座番号　６－４２７３５

※入会希望・退会希望の際は、事務局までお問合せください。